

当たり、確とした思想をもつていたものである。その思想

的なものから生まれたものではなく、長明自身の体験から生まれたものである。それでこそ「方丈記」独特の思想をつくり出してしているのである。

私は、はじめに永積氏と西尾氏の「方丈記」の受けとり方が消極説と積極説の対照的なものがあると云つたが、そのことについて少し触れてみる。

両氏はいずれも、作品の意味構造の上からみておられるが、その観点をやゝ異にされる。

永積氏は長明の生活史的照明をもつてそれを裏付けしておられる。永積氏の説によれば「方丈記」は社会の否定的側面を強調した一面的世界観に基調があり、現実一般を否定しているかのようにみえるが、それは現実の貴族文化を破壊するものへの否定であり、抗議である。彼はあくまで従来の貴族文化社会にひかれ、隠遁生活も徹底できなかった。そこに、最後において素直に自分の態度の不徹底を認め、矛盾を恥じた告白をなしたのである。そして現実の情勢を抱える事ができなかったという限界づきの長明の世界観が「方丈記」の思想として全篇に流れており、それは否定的一面性のみをもつ詠嘆的無常観であると永積氏はみておられる。

西尾氏は「方丈記」の作品自体を主体に考察され、無常の世をいかに生くべきかを追求する積極的な人生記録であるといわれる。氏のみられる「方丈記」の詠嘆的無常観は

観とは異なるものである。「方丈記」の無常は世の中の普遍

封建的変革期の渦中に生きた歴史的人間として、生の道求を敢行した著者の息吹きに直面させられるものであるといわれる。両氏の説はいずれも確かな論拠を持つものでありながら対照的な受けとめ方を示している。しかし永積氏の言われる世相の歪みを反映した消極的なものの中にも「方丈記」を書くことにおいて長明は自己を深化せしめたものであると私は認めたいのである。その点私が「方丈記」を私なりにたどつてきた結果、「方丈記」は世の無常から人間として素直に生きる自分をみいだす、長明の人間性の上でわれであると言つたように、西尾氏の積極説に通ずるものがあるのではなからうか。

尙、「方丈記」が独特の思想を流露することができたのは、意図された構想のみから生まれたのではなく、和漢語潜体という力強い文体も効果を大ならしめたことを付記しておく。

「中学校一年生の作文に

あらわれた用字について」

高 木 恵 子

個性伸長の爲にも社会生活においても、極めて重要な地

位にある作文において、中学校一年生の諸君（玉名地方）が如何なる文字を使い、文章を書いているのかを調査したのがこの小論である。

一、表記について

(1) 送りがない

イ、必要な活用語尾の脱落 (22)

例、起る（起きる）、良（良い）

動詞……二一例、形容詞……一例

ロ、無活用語に送りがないもの (28)

ア、活用のないもの (27)

例、私し（私）、東し（東）、八ち（八）

イ、活用語からきた名詞 (1)

例、話し（話）

ハ、活用語尾を余分につける (3)

例、出でる（出る）

必要な活用語尾の脱落は、ほとんど動詞の活用語尾の脱落である。漢字で書きあらわす場合には、活用する部分と結びつけて覚えさせると幾分か誤りもなおるものと思う。

無活用語に送りがないもの、活用語尾を余分につけたものは、作文の不得手な者の作品に多い。「私し」、「起る」、「畑け」、「話し」と書く誤りは、他地方にもみられ、

彼らの共通の誤りといえる。

(2) 現代かなづかい

イ、「は」、「へ」、「を」を「わ」、「え」、「お」と書き誤つたもの

キ誤つたもの

ア、副助詞「は」を「わ」 一四%

イ、格助詞「へ」を「え」 六%

イ、格助詞「を」を「お」 六%

アの例、ぼくわかさもつていた

イの例、こちらえおいでなさい

イの例、しのはおきつてこい

いずれも現代かなづかいのきまりを正確に認知していないのが原因で誤ちをおかしている。花水国仁氏が調査された大分地方も、副助詞の誤りが九パーセントで一番多くなっている。格助詞より副助詞の方が誤り易いことになる。

ロ、「じ」、「ず」を「ぢ」、「づ」と書いて誤つたもの (3)

例、けづる（けずる）、いちぢ（いちじ）

ハ、長音の誤り (19)

ア、長音の脱落 (6)

例、しゆり（しゆうり）、まんじゆ（まんじゆう）

イ、余分に長音をつけたもの (13)

例、うれしいそうな（うれしそうな）、いっしょう（いっしよ）

しょう（いっしよ）

る。「畑け」、「話し」と書く誤りは、他地方にもみられ、彼らの共通の誤りといえる。

長音の脱落より余分に長音をつけた者の方が、二倍以上多い。「うつしよ」を「いつしよ」とするものが、五〇名中八パーセントで一番多い。

ニ、促音便の脱落

例 いた(いつた)、思た(思つた)、
つた(つつた)

五〇名中、一六パーセントが誤っている。促音便の誤りは、作文を得意としない者の文章、程度の低い文章に多く出現する。「もていく」などは、促音便のゼロ表記と聞くが、これも、子供の心理と何らかの関係があるように思える。

ホ、濁音の誤り(22)

a、濁音の脱落(13)

例 か(が)、ぼく(ぼく)、こはん(ごはん)

b、濁音を必要としないのに濁音をつけたもの (9)

例 ばかり(ばかり)、ぼぐ(ぼく)

濁音の脱落や濁音を必要としないのに濁音をつけたものは、これは筆の勢の為生じるものもあると思われる。前者は文を先へ進めんが為に、濁音を打つべきところを、すぐ前の字が濁音を必要としないので続けてしまつて誤ちをおかしてしまふ。後者はこれと反対に、濁音を打つた次の字まで濁音を付けてしまふ。例にも挙げておけるように、「ば

例 うれしいそうな(うれしそうな)、いつしよう(いつしよ)

かり」を「ばかり」、「ぼく」を「ぼぐ」の如き誤りがそれである。

(3) 文字づかい(3)

イ、擬声語を片仮名で書いてない(2)

例 むしやむしや(ムシヤムシヤ)

ロ、外来語を片仮名で書いてない(1)

例 びんぼん(ビンボン)

(4) 助詞の脱落(11)

イ、格助詞「が」、「の」、「を」、「へ」、「に」、「と」の脱落 二〇%

ロ、副助詞「は」の脱落 二%

助詞の脱落は、おもに格助詞であることがわかる。これらの脱落をおかした作品は、まずまずの出来ばえであるので、もう一度読み直せば是正出来るものと思われる。

(5) 句読点

イ、句点の誤り

a、句点が読点になつてゐるもの 二四%

b、句点が脱落してゐるもの 二四%

ロ、読点の誤り

a、読点が句点になつてゐるもの 四%

b、読点が脱落してゐるもの 四%

ハ、句点も読点も正しく理解してゐるもの 四四%
句点の誤りが、読点の誤りよりはるかに多い。いずれの

誤りも、その果たす役目をはつきりと理解させる必要がある。読点が多く使用されているものほど漢字使用が少くなっている。

(6) 会話符号

イ、会話符号の用いかたの誤り 二%

ロ、会話符号が必要であるが用いていないもの 三四%

会話符号の正しい用い方、会話においては絶対に会話符号が必要であるということのみをこまめさせることが大切である。なお、会話符号を全く必要としないものが二八パーセント、会話符号を正しく用いているものが三六パーセントであった。

(7) その他

文の前後から推察して、この言葉であろうと思われるものが三七例見い出せた。このような誤りが多ければ多いほど読みにくさが増すわけである。

二、文章について

(1) 段落

イ、書きはじめを一字下げて書いているもの 六六%

ロ、書きはじめを一字下げて書いていないもの 三四%

文章の書きはじめを一字下げて書いてはいるが、あとは

段落をつけることなくどんどん続けているのが全部といつてよい。なるべく段落のつけやすい題を選ぶことが、重要なことであると考える。

(2) 文脈

彼らの作文の多くは、重複型、羅列型、混合型のいずれかに属するが、これらは接続詞や接続助詞の使い方が単文の訓練が大切である。特に、主語、述語の関係を明確に認識させるべきである。

(3) 冒頭語

冒頭語が読者を魅了させる働きは大きい。最初の一行で作文の得手、不得手を察知出来るものが、彼らの文章である。

(4) 題材

イ、家族について (9)

ロ、動物について (8)

ハ、ある日の生活について (24)

ニ、感想文 (4)

ホ、その他 (5)

生活文の方が彼らにとつては、より親しみ深いことがわかる。男子が動物へのたまらない愛情や自己の体験を書いているのに対し、女子は自己の体験でなく家族のものなどについて書いている。これは、女子より男子の方が活動性の強いこと、もしくは興味や関心が活動的なものへ向けら

文章の書きはじめを一字下げて書いてはいるが、あとは

三九〇

れていることを暗示しているものと思われる。

三、方言

方言と思われるものが四一見られたが、方言は会話にも地の文にも出てくる。会話の中における方言は、地方色が豊かになると共に会話が話し言葉に近づいて好ましいと思いが、地の文で方言ということになると、共通語というものを理解しないということにもなりかねない。地の文での方言使用は、徐々に是正していく注意が肝要である。

四、漢字

(1) 漢字数

漢字数三九七〇、行数一四五一で、男子においては一行平均の漢字が二・八字、女子においては一行平均の漢字が二・五字、両者の一行平均漢字は二・七字である。男女とも同じ位漢字を使用しているとみてよい。しかしながら、男子は漢字を多く使用するものと少く使用するものとの差がひどく、女子はこれに比べて極端な差はなくわりにまつまつていているという相違が見い出せる。

大塩卓氏は、教育者の立場からいろいろとくわしく調査して、子供の作文では一行二〇字語に約四字の漢字があるのが読み易いと言つておられる。男女の一行平均漢字数は二・七字で、四字には及びもつかない。彼らの作文における正しい姿の一行平均漢字数、即ち当然漢字で書くべきところは完全に漢字で書いたとすれば、男子の一行平均漢字

について書いている。これは、女子より男子の方が活動性の強いこと、もしくは興味や関心が活動的なものへ向けら

数四・三字、女子が四・〇字で大体四字となる。この位であると大塩氏の言われるように、彼らの作文はぐつと読み易さを覚える。

彼らの作文の読みにくさは、漢字使用が少いことと、正しい文字づかいをしていないことが原因となつていゝ。名詞を假名書きにすれば、その名詞は他の品詞におされて独立性が非常に鈍つてくる。作文内容からみても漢字数からみても、作文は能力に關係するものと思われる。

(2) 漢字の誤り

漢字の誤りには、

イ、あて字

ロ、意味は近いもの

ハ、一部しか覚えていないもの

ニ、部分をとりちがえているもの

ホ、他の字との不注意な混用

といつた原則的なものが見られる。「僕」を「僕」、「たくさん」を「多さん」などは、どこの中学生にもある共通の誤りである。

(3) 漢字の習得範囲

小学校において習得した八八一字の教育漢字の中、四一七字が使用されている。即ち、四七・三パーセントの使用率である。使用された漢字は、彼らにとつて親しまれている漢字ということになり、使用されなかつた四六四の漢字

は、彼らの生活から縁遠い存在なのである。

四一七字のうち、二〇回以上使用されたのが五四字あるが、それは三年生までの下学年で習得した漢字ばかりである。これらの漢字はいたって字画も少ないのが多く、そして又理解しやすくなんの抵抗もなく用いられる漢字と言える。

教育漢字はみな必要であるから、義務教育終了までには完全に覚えて生活化されなければならないと思う。なお、教育漢字以外の漢字が七一字使用されている。

五、品詞

助詞、動詞、名詞、助動詞、副詞、代名詞、数詞、形容詞、接続詞、連体詞、感動詞、形容動詞の順で使用されている。

最も多く使用されている助詞は三五・七パーセントで、格助詞三一・一三回（「が」、「と」、「に」、「の」、「は」、「を」は四〇〇回以上使用）、接続助詞一三七七回（「て」……八〇二回、「ので」……一〇三回、「と」……一四七回使用）、副助詞二五一回、終助詞一一八回となつている。接続助詞のほとんどが「て」、「ので」であることは、非常に長い文章であり、文が平板に流れていることを示すものである。時間の流れにまかせて文を続けたにすぎぬ。彼らの低級な作文には、最初と最後の文章とは全然関係がない単なる方向性のない連続がみられる。接続のこぼの乱用は、話し言

葉の悪い癖をそのまま文章にもつてくるものと思われる。

動詞は一九・九パーセントで、「ある」、「いる」、「言う」、「思う」、「する」、「なる」、「見る」などが多く使用され、活用形では連用形が半分以上となつている。これは、言葉の継続から自然多く用いられたのである。連用形に続き連体形、未然形、仮定形、命令形と並ぶ。

名詞は一九・二パーセントで、動詞と大体同じ位用いられているとみてよい。「朝」、「上」、「学校」、「草」、「雨」、「家」、「海」、「おかあさん」、「おとうさん」、「こと」、「てはん」、「自転車」、「やぎ」、「先生」、「時」、「所」、「中」、「人」以上の一八例が一五回以上用いられたのであるが、その中でも「おかあさん」は九六回も用いられ、一際目立っている。「おとうさん」の方は二二回で、「おかあさん」には及ばない。彼らの脳裡には、おとうさんの存在よりおかあさんの存在の方がより大きいことを示すものである。

助動詞の一三・一パーセントのうち、「た」（四九四回）、「ます」（一七八回）が特に多く用いられ、「う」、「です」が次に多い。

他の品詞は、ごく微量ずつの使用となつている。

以上、各項目別に述べたのであるが、彼らの作文全体を通じていえることは、考えながらまとめて順序よく書くということがないために

性のない連続がみられる。接続のことばの乱用は、話し言

いうことがないために

一、送りがなやかなづかいが不用意にも誤っている。書いた後で自己の作品を推敲しなせば是正出来るものが多い。

二、句読点が理解されていない。

三、助詞の誤用や脱落。

四、段落が鮮明でない。

五、くりかえしが多い。

六、接続のことばの多用。

七、あて字や習得の不確かさからくる誤りが多い。

の諸点が挙げられる。

これらの問題が解明されることにより、作文指導上の難点や彼らの学習における抵抗も自然和らぐものと信ずる。

若山牧水

(人間性とその芸術観について)

森 麗 子

明治三十年から四十年にかけての歌壇はまさに「暴風と怒濤」の時代であった。

因習的和歌と御歌所的歌壇の倦怠の中で、現状打破、旧套改革の反旗を挙げて、より高くより美しい生を空想の綾

で華麗に染めあげようとした新詩社の浪漫主義短歌も、品子の歌集「舞姫」をその頂点として徐々に下火になつていった。

そうした浪漫主義への訣別として、あるいは新しく起つた自然主義への橋渡しとして前田夕暮と共に若山牧水は存するのである。

故にともすると牧水は浪漫主義への反逆者であり、単に自然主義の歌人としてのみ論ぜられている。しかしそれはあくまで「情緒におぼれ、人工の小楽園に白昼夢をむさぼる」かのような、明星への反逆であり、「有限なる生の彼方に無限の憧憬をよせる」浪漫主義そのものへの反逆では決してあり得なかつたと信ずる。

ここで私は、自然主義歌人牧水としてでなく浪漫詩人牧水と云う見地に立つて、彼と関係の深い幾つかの方向から人間牧水の内面世界にスポットを当ててみたいと思う。

牧水と自然、それは切り離して考える事は不可能な程密接な関係を持つている。牧水文学のすべては、そこに根源を發し、そこに帰着すると云つても過言ではない。

「自然の一部としての人類人間」の考えに立脚して、自己の追求を自然の裡に求めたのである。多くの浪漫主義文学者が又そうであつたように、そこにこそ浪漫派牧水の詩精神の表われを見る事が出来る。

又、牧水の自然は汎神論的自然であり、「自我即自然」